

特別号

カトリック麹町教会



イグナチオ年

Ignatius

magis

マジス = 「より、もっと、さらに」

教会テーマ

イエスがたたき希望の扉をひらいていこう 新たにつながるために 2030年に向けて一歩ずつ

聖イグナチオ教会 イグナチオ年記念

英 隆一郎神父

聖イグナチオの伝記



イラスト 大谷結子

自分をささげる祈り

主よ、私の自由をあなたにささげます。
私の記憶、知恵、意志をみな受けいれてください。

私のものはすべて、あなたからのものです。
今すべてをあなたにささげ、み旨に委ねます。

私に、あなたの愛と恵みを与えてください。

私はそれだけで満たされます。

それ以上何も望みません。

アーメン

本冊子は、イグナチオ年にあたり教会報『マジス』において2021年6月号～22年4月号に連載された英 隆一郎神父（当教会主任司祭＝掲載時）の連載記事をまとめたものです。グループなどでの分かち合いにご利用ください。

Ignatius
イグナチオ年

聖イグナチオの伝記①

イグナチオの生きた時代 と若き日々

2021年5月20日からイグナチオ年が始まった。私たちは聖イグナチオ教会のメンバーでありながら、聖イグナチオのことをあまり知らないのではないか。イグナチオその人を知るため、自叙伝にもとづいて、

イグナチオの生涯を紹介して、私たちの信仰生活を見直す機会としたい。

時代背景

彼は1491年頃スペインのバスク地方のロヨラ家に誕生した。イグナチオが



かれは26歳のときまで世俗の虚栄に溺れていた。特に、おもしろい大きな名誉欲を抱き、武芸に喜びを見いだしていた。(自叙伝1)

生きた時代はどういうものだっただろうか。

彼が生まれた頃から、ポルトガルとスペインが帝国として最盛期を迎える。大航海時代の幕開けであり、ヨーロッパの植民地支配が始まることになる。イタリアではルネッサンス文化の頂点を迎えた頃である。それに伴い、旧態依然とした中世カトリック教会の権威が揺らぎだし、ルターによる宗教改革の波が押し寄せることになる。つまり、ヨーロッパ社会が中世から近世への移行する時期であり、社会全体の価値観が大きく変わる節目の時であった。カトリック教会も変わらざるを得ない時を迎えていた。この大きな変革期にあつて、神はイグナチオという聖人をこの世に遣わすことになったのである。

イグナチオの人となりを見てみると、中世の古典的価値観をもちながら、同時に新時代に対する柔軟な開かれた心をもっている。現在の私たちも時代の大きな節目にいてのではないだろうか。私たちは何を残し、何を変えていく時なのだろう。

うか。

青年時代

イグナチオは若い頃、主君に仕える騎士の教育を受け、宮廷で家臣として働いていた。中世の騎士道で自己の理想としていた。その面では、イグナチオは中世の最後の騎士と言えるかもしれない。騎士とは、主君に仕え、規律を重んじ、貴婦人に敬愛を示しながら、正義のために命をかけて戦う者である。騎士道の理想を求めているが、実際のところそれほどめめられた生活をしていなかった。武芸や武器に凝り、決闘も辞さない向こう気のある強い青年であった。乗馬・剣術・ダンス・トランプなどが大好きで、宮廷内では身だしなみに気を配り、エレガントにふるまうて、女性にモテていたようである。いわば当時の若者の流行をそのまま追った生活を送っていたのだ。

彼の自叙伝は回心前の自分を語るところから始まる。「彼は26歳の時まで世俗の虚栄に溺れていた。特に、おもしろい大きな名誉欲

を抱き、武芸に喜びを見だしていた」と。神は虚栄にまみれた青年を特別な方法で召し出すことになる。26歳で経験したパンプローナの戦いを通して。

◆自らに問いかけてみる◆

①あなたは26歳まで何をしていただろうか。何を理想として生きていたか。実際に何をしていただろうか。自分の受けた教育と当時の自分の生活をふりかえってみよう。

②今の時代を見つめ直してみよう。何を次世代に残していくべきだろうか。逆に、何を変えていくべき時だろうか。個人として、また、教会として。



読んでみよう！

李聖一神父著

『神の指ここにあり』

(ドン・ボスコ社刊)

1990年のイグナチオ年(イエズス会正式認可450周年)を記念し、イエズス会学校中高生のために執筆された「聖イグナチオの生涯とイエズス会創立の物語」(副題)の改定版。

Ignatius
イグナチオ年

聖イグナチオの伝記②

挫折から新しい道へ

人生の大きな挫折

イグナチオの最大の転機は、パンプローナでの戦い



こうして、少しずつではあったが、自分を動かす神と悪魔の二つの霊をわきまえるようになった。(自叙伝8)

である。フランス軍とスペイン軍で紛争が発生し、フランス軍が国境間近にあるパンプローナの町を包囲す

る。その高台にあるパンプローナ城はなかなか難攻不落の城であった。イグナチオはスペイン軍側の陣営で戦っており、戦況が不利にもかかわらず、徹底抗戦を主張する。結局、彼は砲弾によって重傷を負ってしまった、そこから敗戦が決まった。

それは彼にとって、大きな挫折であった。足に重傷を負い、故郷に運ばれ、静養することになる。足が奇形になって、外見が醜くなることを極度に恐れ、麻酔なしの手術を2回受けることになる。騎士にとって、かっこよく見えることは命よりも大事だったのである。ただ外見を気にするだけで、どれほど犠牲が必要なのだろうか(今でもそれは変わらないかもしれない)。

少しずつ回復していき退屈になったので、当時流行していた騎士物語(現代ならば、ヒーローが活躍するアクション映画か)を読みたいと思う。ところが、信心深い家庭だったので、イエスの生涯と聖人伝しかなかった。仕方なしに彼はそ

の2つの本を読み進める。そうすると、彼は今まで夢見たことがない別の世界に気づく。過去の立派な聖人たち(アシジのフランシスコやドミニコ)の英雄的行為に強い興味をそえられるようになる。例えば、一生涯肉を食べない、裸足で無一文でエルサレムまで徒歩巡礼をするなどである。

新しい夢想

それまでの彼のヒーローは、かっこいい伝説の騎士であり、その人たちを模範にして、スペイン王やその女王など高貴な人に仕えることであった。それに対して、過去の聖徳高い聖人たちが新たなヒーローとして登場し、彼らのように、王であるイエス・キリストに仕える望みがわいてきたのだった。

そこから彼の葛藤が始まる。騎士か、使徒か、どちらの生き方を選ぶか。騎士の生き方について何時間も夢想を続けた。そして、イエスの使徒の生き方についても同様に何時間も思い巡らした。それぞれ生きがいとやる気を心に強く覚えた

のだ。この体験が彼の黙想の始まりであった。

彼はふと気づく。世俗的な騎士の希望は、黙想の後、それほど喜びが長続きしない。一方、イエスに仕える生き方を黙想した後は、喜びと平安がずっと続くことに気づいた。これは彼の最初の霊的識別(神の主旨はどちらにあるかを判断していくプロセス)だった。

ついに彼は結論に達する。すべてを棄てて、イエスに従う道を選ぶことにしたのだ。家族に引きとめられることも気にとめず、彼は巡礼用の粗末な服をまとい、貧しさのうちに巡礼者の生き方を始めたのだった。

◆自らに問いかけてみる◆

①自分の人生で大きな挫折を経験したことがあるだろうか。それは、今の自分にとってどういう意味があったらう。

②何時間も夢中になれることがあるだろうか。どのような喜びを感じるだろうか。

Ignatius
イグナチオ

聖イグナチオの伝記③

祈りと苦行の日々

隠遁生活を始める

回心したイグナチオは、モンセラットの聖母像の前で自分を献げ、新たな人生

を始める。バルセロナへの道を避け、マンレーサという小さな町に滞在することになった。最初は2、3日の逗留予定だったが、結局



このころ、神はちょうど小学校の先生が子供を教えるようにかれを教え導かれた。(自叙伝27)

10ヶ月以上もどまることになる。孤独の中に身をおき、過去の生き方と決別して、イエスの弟子として生まれ変わる時となった。

それまでの宮廷生活では、あまりにおしゃれだった。過去を棄てたしるしとして、髪も爪も切ることなく、肉食やワインをまったくとらず、非常に厳しい苦行の生活を行った。実際のところ、世俗的なもの一切を棄てるならば、心の囚われから解放され、大きな慰めと平安に満たされる。イグナチオは祈りと苦行の日々を始めて、心穏やかな日々を過ごすことができた。毎日7時間を個人の祈りに費やし、近くの教会で典礼(ミサや朝晩の祈り)にあずかり、食べ物に施してもらった。時には心に誘惑を受けることもあったが、それを退けて、苦行を続けていた。

すさみによる浄め

隠遁生活を送ると、神の恵みに満たされるのは確かなことだ。と同時に、それは大きな苦しみと直面する時でもある。イグナチオに

も試練の時が訪れる。4ヶ月くらいは平安な日々であったが、次の3ヶ月は暗闇の時であった。総告解(生涯の罪を全部告白すること)を行ったが、それ以後も、過去の罪が数珠つなぎのように思い出されてしまう。毎週告解をしても、罪深さから解放される

ことがなかった。そのような状態は疑悩(あるいは小心)と呼ばれている。疑悩に陥った人は、神のゆるしと救いにあずかれないという恐れに囚われ、たとえ毎日告解をしても罪深さを拭うことができなくなってしまう。イグナチオは男らしくてマツチョ系なのに、なぜこのような疑悩に陥ったのか不思議に思われる。彼は自殺を考えるほどに絶望の淵に立たされることになる。しかしながら、時が来ると、悪夢の状態から目が覚め、過去へのこだわりをおくことができた。

すさみの体験は、心の浄めのためである。外的な苦行はそれほど難しいことではない。もっと大変なのは、自分の心の暗闇と直面することなのだ。靈魂を浄める

ため、神はすさみの時を与えられることがある。心の浄めを経て、人は内的に刷新されていく。

イグナチオはその後、真の神秘体験をすることになる。特に、大きなものはカルドネル川辺での知的示現である。彼は『靈操』の「原理と基礎」を深いレベルで悟ったのであろう。彼に霊的自由(不偏心)が与えられた。その後、極端な苦行をやめ、爪や髪を切り、祝日には肉食やワインも飲むようになった。赤貧の中にあっても、自由な心で、本当の妨げを退け、真に神に導くものを選ぶようになっていく。ここからいよいよ彼の巡礼の旅が始まっていく。

◆自らに問いかけてみる◆

①すさみ(浄め)の時を体験したことがあるだろうか。その体験によって、どのような霊的進歩があったと思えるだろうか。

②神の恵みを強く実感したのは、どのような時だろうか。それはあなたのライフスタイルにどのような影響があっただろう。

Ignatius
イグナチオ年

聖イグナチオの伝記④

新たに見る

イグナチオがすさみから解放されたあと、いくつかの霊的体験をした。今回はそれを簡単に説明したい。

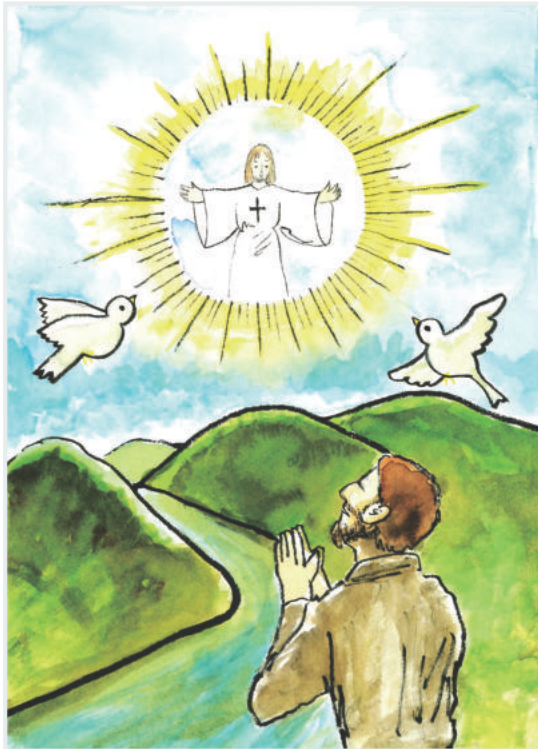
1. 三位一体の神秘を体感する

私たちを悩ませる教義の

一つが三位一体であろう。とても大切なものだが、その意味を正確に理解し、人に伝えることはとても難しい。

イグナチオは三位一体の神秘を3つの鍵盤のようなものとして内的に見た。そ

：下の方を流れる川に向かい、しばらく腰をおろした。こうしてそこにすわっていると、理性の目が開け始めた。(略)霊的なこと、信仰および学問に関する多くの問題を理解し悟った。これによって非常に明るく照らされたので、すべてが新しく感じられた。(自叙伝30)



の鍵盤のハーモニーが神の本質の同一性を奏でていたのだろう。彼はその素晴らしさのために、おせび泣きが止まらず、その感動は生涯消えなかったという。

2. 神の創造の神秘を見る

創世記の最初に記されている神の創造の神秘を、彼は内的な目で見た。人によつては創世記の描写をただの物語のように受け止めていることもあるだろう。しかし、それは神の現実の出来事であり、イグナチオはそれを見たのである。神がこの世を創造し、今も創造の業が働き続けていることは事実なのだ。

3. ご聖体の中に現存するキリストを内的に見る

時によつては、ご聖体の中に本当にキリストは現存されるのか、理性的に疑うこともあるだろう。目に見えないし、ホスチアの味が変わるわけでもない。プロテスタントが認めてない教えでもある。しかしながら、イグナチオはしっかりと聖体の中に神の現存を見いだした。

4. キリストの人性を内的に見る

私たちは聖書の中のイエスの話を読んで感動する。でも下手をしたら、過去の偉大な人物としてだけしか見ていないかもしれない。しかしイエスは今も生きておられる。イグナチオのよ

うな霊的目が開かれている人にとって、祈りの中で、イエスの姿を今も目撃することができると言えるのだ。彼の霊的体験はとても深かったのだ。たとえ聖書がなかったとしても、自分が見たことだけで信仰のために自分の命をささげる決意ができる」と述べている。

5. カルドネル川辺に

おける知的直観

すべてのまともなカルドネル川辺での神秘的照らしだと言われている。その内容は詳細に語っていないので、よく分からない。霊操の構想だけでなく、将来のイエズス会の設立まで示されたと言われている。その体験から、「すべてが新しく感じられた」(自叙伝30)と記されている。このことばから、今年の

イグナチオ年のテーマが取られた。つまり、「すべてのものをキリストにおいて新たに見る」である。イグナチオがマンレーサで祈りを深める日々を送った実りとして、新しさを手に入れた。私たちもイグナチオに親しくなることで、自分なりの新しさを見いだしていこう。

◆自らに問いかけてみる◆

①過去の体験をふり返ってみて、自分が新しくなれた特別の体験があるだろうか。それを思い出して、味わってみよう。

②コロナの自粛生活を改めてふり返ってみよう。その中で、どのような新しさに気づいただろうか。それを意識して、これからの生活の励みにしてみよう。



読んでみよう!

ベタンコール S. J. 著
英隆一朗 S. J. 訳

『イグナチオの足跡をたどって』

(夢窓庵刊)

将来の道を探し、自分の使命を探している人に向けて書かれたもの。黙想やふりかえりに。

Ignatius
イグナチオ年

聖イグナチオの伝記⑤

エルサレム巡礼

行動の人、 巡礼者イグナチオ

マンレーサで神の恵みを受けた後、イグナチオは巡礼の旅に出る。バルセロナから船に乗り、イタリアを徒歩で渡り、再び乗船して、聖地エルサレムに向かう。



「神がきつとエルサレムへ行くために配慮してくださるという確信を心の中に持っていた」(自叙伝42)

彼の話を聞いた人々の中には、同伴を願い出る者や、

多額の旅費を寄付する者も出た。しかしながら、イグナチオは、「神だけを頼ることがかれのせつなる念願だったので、ひとりで行こうと決めた。・・・その

ような考えから、ひとりりで乗船するのみならず、まったくなんの用意もせずに行きたいと思った」(自叙伝35)。現代では考えられないが、全くの無一文で旅に出るのである。

イグナチオは行動の人である。ただ頭で勉強するだけでなく、実際に行動して、体全体で会得していくタイプだ。現代人がネットで情報を得るだ

けで何かを知ったような気分になっても、実際は何も身に付いていないのと対照的である。黙想にしても、巡礼にしても、実際に体験してみても初めてその素晴らしさを体得できるのだ。

実際、厳しい旅であった。船旅では暴風雨にあい、ペスト大流行の地を徒歩で横断し、兵士などから手荒い扱いを受けた。無一文の旅は生命の危機に直面することと裏腹であった。安心安全が全くない道である。彼は「神がきつとエルサレムへ行くために配慮してくださるという確信を心の中に持っていた」(同42)。そして、実際に聖地エルサレムにたどり着いたのである。

キリスト中心の霊性

彼が神だけにしか頼らなかつたからこそ、「引つ張られて道を歩いている間、キリストが上方から常に見守っておられるのを見て、主から大きな慰めを受けた」(同48)。全くの無一文の困難な巡礼だったからこそ、生きたイエスの姿を何回も目撃し、深い慰めが与えられた。巡礼の実りは、

イエス・キリストとの深い絆である。

イグナチオの霊性には、きわめて強いキリスト中心主義がある。エルサレム巡礼の動機は、イエスが実際に活動した場に身をおきたいという強い望みであった。この姿勢は、イグナチオの『霊操』の中に現れている。特に第2週以降の観想では、主キリストとそのまわりの情景を思い浮かべ、あたかも自分がそこにいるかのように観想するとある。観想の中で、私たちもイエスの姿をありありと見て、そこから霊的力を汲むことができるのだ。

行き詰まりから新しい道へ

イグナチオはエルサレムに生涯留まりたいという願いをもっていた。永住し、多くの人々の靈魂を救いたいという強い決意である。ところが、エルサレム周辺はいつの時代も情勢が不安定であり、明日は何が起るか誰も分からないところだ(今もそうだが)。聖地を管理していたフランシスコ会の神父は、イグナチオの望みを聞いたとき、トラ

ブルメーカーの滞在によって大きな混乱を心配したのである。滞在を認めず、巡礼団とともにイタリアに戻るように命令する。

プランAはかなえられない。彼はやむなくヨーロッパに戻ることにして、プランBを選択せざるをえなかった。それは、人々を霊的に救うために司祭になることだった。そのため、バルセロナに戻って、勉強を始める決意を固めたのである。一つの道が閉じられることによって、次の道が開かれてくる。イグナチオはスペインに戻り、新しい道を歩み出す。

◆自らに問いかけてみる◆

①どこか聖地巡礼をしたことがあるだろうか。その体験は自分にとってどういう意味があっただろう。

②苦難の中でイエスの慰めや力づけを感じたことがあるだろうか。たとえイエスの姿を見なくとも、恵みを受けたことがあるだろうか。

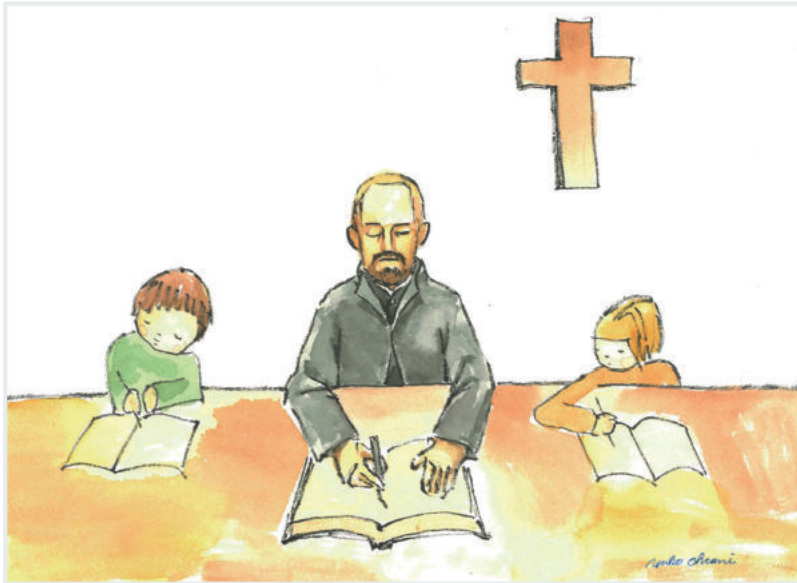
Ignatius
イグナチオ

聖イグナチオの伝記⑥

勉学の中での闘い

勉学と誘惑

イグナチオはエルサレムからスペインに戻り、勉強を始める。彼は騎士として訓練を受けたが、ラテン語



「かれの場合、何か暗記しようとする、霊的な新しい知識がわき出て、喜びと味わいを感じるのがつねであった。どんなに努力してみてもそれを止めることができなかった。このことについて繰り返し反省し、…しだいにそれが誘惑であることがわかってきた。」
(自叙伝 54～55)

などの教養科目は勉強していなかった。彼は10代の少年たちに交じってラテン語の習得から勉強を開始する。
勉強の中で困ったことが

起こった。今まで以上に霊的な慰めを感じて、勉強がはかどらないのである。例えば、「J」という文字が出る、とイエスを思い出し、「M」という文字を見るとマリアを思い出して、胸がいっぱいになって勉強が続けられないのだ。彼はそのような慰めをよく識別して、そのような慰めは悪魔からの誘惑だと判断して、それを退けることにした。それでようやく勉強に集中できるようになった。

実際のところ、ごく単純な勉強（外国語の文法の暗記など）や、日頃の単調な仕事に大きな慰めはない。その単調さに耐えられず、霊的慰めを逃避の手段にしてしまうことがある。イグナチオは体験からその誘惑が分かったのだ。のちに、神学生に対して忠告している。神学生は司祭として人々のために働くために修道会に入るが、長くてつらい勉強をせねばならない。そういうとき、勉強（慰めなし）から逃げる口実に、人々とかかわり（慰めあり）に逃げてしまうことがある。イグナチオは、そう

いう神学生に対して、現在の勉強こそが神への栄光を表すものだから、そこに集中せよと述べている。

学生だけではないだろう。多くの人は単調な仕事を繰り返す毎日を生きている。平凡な雑務に大きな慰めはないのが普通だ。にもかかわらず、今日の小さな使命に全力を尽くして取り組むことにこそ、神に奉仕する真の道があるのだ。

使徒的活動と迫害

イグナチオは勉強にいろいろ合間に、人々と霊的会話を交わしたり、熱心な人に霊操を授けることがあった。イグナチオに接した人の多くは感化され、回心して生きる人々が続出してくる。それに対して、当局側はイグナチオが異端者ではないかと疑いをかける。彼は結局、5回の異端審問と2回の投獄を経験した。もちろん彼の信仰に異端の要素は全くないので、どこでも釈放されるのだが。イグナチオは本物の生き方をして、まわりの人に真の影響力があつたからこそ、どこでも疑いがかけられ、いわれない迫害を受けた。本物だからこそ、中傷や批判を甘受せねばならないのだ。「義のために迫害される人々は、幸い」（マタイ5:10）。彼は肝っ玉が据わっていた。どんな弁護士にも有力者にも頼らず、ただ神だけに頼って、度重なるさげすみや辱めを受け止めたのである。

◆自らに問いかけてみる◆

①単調な仕事や勉強をするとき、どのような誘惑を感じただろうか。何に逃避しようとしていただろうか。

②良いことをするがために、批判されたことがあるだろうか。その体験は、どのような恵みがあつたと思えるだろうか。

Ignatius
イグナチオ年

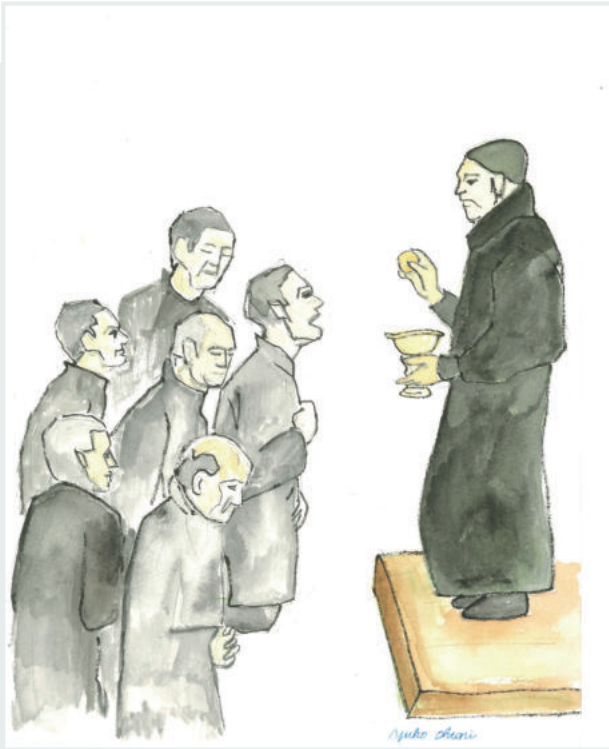
聖イグナチオの伝記⑦

仲間との出会いと 社会への働きかけ

主における友

イグナチオは迫害を受けたスペインを去り、パリで神学の勉強を続けることにした。当時のパリ大学は

ヨーロッパ中から優秀な学生が集まり、比較的自由な雰囲気の中で勉強にいきなすことができる場だった。学費の問題があり、北ヨーロッパまで物乞いに行くこ



「このころ、かれは学士ペトロ・ファールブル（※編注）と学士フランシスコ・ザビエルと知り合ったが、後ほど霊操によって、このふたりを神に奉仕するものとすることに成功した。」（自叙伝82）

※編注 原文ママ。本文中ピエール・ファールブルと同

ともあった。もう一度ラテン語の復習をしてから、本格的に哲学と神学の勉強に打ち込んでいた。

パリに行ったもう一つの目的は、志を同じくする仲間を集めることだった。それまで多くの仲間とともに歩みながら、離れてしまう人びとが多かった。このパリに来て初めて、生涯をともにする同志と出会うことができたのだ。特に重要なのが、イエズス会の初期メンバーとなるフランシスコ・ザビエルやピエール・ファールブルとの出会いである。

生涯付き合える仲間をもつことは人生の大きな喜びの一つではなからうか。そのような友人はたとえ会うことが少なくなつたとしても、心の絆を結びながら生きることができると。働く場が違つても、ずっと支え合いながら歩むことができる。

イグナチオを含む最初の7人の同志は、パリのモンマルトルの丘にある聖堂で誓願を立てた。エルサレムに行き、そこで人びとの霊的な奉仕を行うこと。それ

が無理な場合はローマに行き、教皇からの派遣に委ねること。そして、貞潔の誓願を立てたのである。この誓願によって、彼らは主における友となり、生涯、ともに歩むことになった。

故郷での活躍

そののち、イグナチオの体調が著しく悪化したため、医者勧めによって故郷で静養することになった。

故郷では体調もよくなり、さまざまなことに着手する。一つは子どもたちにカトリック要理を教えたことだ。実兄からは誰も来ないだろうと反対される

が、実際のところ、多くの子どもたちが集まるようになる。さらに大人もその話を聞きに来るほどの大盛況だった。このような体験から、イエズス会には青少年の教育に心を配る伝統が生まれた。会員の最終誓願文

には、年少者の教育に特別に意を用いる約束が入っている。だから、聖イグナチオ教会では年少者のための教会学校や青年会活動に力を入れている。現代のUA

Ps（イエズス会使徒職全体の方向づけ）でも力点が置かれている点だ。

イグナチオが故郷でもう一つ力を入れたのは、その地方にはびこっていた悪習慣を止めさせる社会的働きかけだった。このような伝統から、今でもイエズス会は社会に対して積極的な働きかけを行っている。正義にかなわない社会の流れに対して明確に反対を表明し、貧しい人や弱い人を助けるように心がけている。聖イグナチオ教会でも社会的なかわりはこれから実践していきたい。

◆自らに問いかけてみる◆

①自分にとって本当の友と呼べる人がいるだろうか。真の友とは自分にとってどのような存在だろうか。
②社会の中で弱い者・小さな者（青少年を含む）をどのように大切にしたいか。自分が貢献できることがあるだろうか。

Youtubeで
「聖イグナチオ
の霊操」
配信中！



聖イグナチオの伝記⑧

イエスの仲間として

ラ・ストルタの示現

イグナチオとその同志たちはパリを後にして、ベネチアに向かう。当初の目的であるエルサレム行きを船を待つためであった。そこでは、赤貧のうちに祈りを深め、広場で説教をして司牧的な活動を行った。残念ながらベネチアとトルコの間で紛争が起こり、巡礼船が出る見込みが立たなくなった。そこで当初のプランBに従って、ローマに行き、教皇の指示に従うことを決める。

ローマに向かう途中、イグナチオがラ・ストルタという小聖堂で祈っていると、大きな神秘を体験する。父なる神がイグナチオをおん子キリストと一緒に置いてくださるのを観たのである。十字架を担うキリストが現れ、おん父がイエスに對して、「あなた（イエス）がこの者（イグナチオ）を

あなたの僕となることを望む」と言われ、次にイエスがイグナチオに「あなた（イグナチオ）が私たちに仕えることを望む」と言われた。

この靈的体験はイグナチオの人生で決定的なものであり、かつ後のイエズス会のあり方を基礎づけるものとなった。イグナチオ的靈性はイエス中心であり、仕えることが中心となった。いわゆる「奉仕の神秘主義」と名付けられている。つまりイエスの望みや思いを汲みとり、イエスに仕え、人びとに奉仕していく靈性なのである。

後に「イエズス会」という名前を修道会に付けたのは、この体験に基づいている。それまでの修道会は「ベネディクト会」や「フランシスコ会」のように創立者の名前を付ける慣習があったにもかかわらず、「イグナチオ会」とはしなかった。イエスがその中心にあり、

私たちは単にイエスに仕えるものだという信念から、「イエズス会」と命名したのである。

初代師父たちの討議

Deliberatio Primorum Patrum

ローマに集結した初期のメンバーが直面したのは、将来のことだった。教皇の要望に応じていくならば、彼らはヨーロッパ各地に散

らばってしまうことになる。そのままバラバラになるのか、一つの団体としてこれからともに歩むのかという岐路に立っていた。

そこで、①これからのグループとして活動を続けるか。②そのため、一人の長上を決め、従順の誓願を立てるかどうかを決めなければならなかった。彼らは靈操の選定の方式を取り入れ、2ヶ月ほどかけて、祈りと討議を繰り返すことになった。



「…父なる神が自分をおん子キリストといっしょに置いてくださるのを見た。」（自叙伝96）

最終的に全員一致で、修道会として歩むことを決議した。この話し合いがイエズス会創立の第一歩となったのである。

現在、このような討議のことを、「共同識別」と呼んでいる。イエズス会に関連する団体やグループはこの共同識別を行うように強く推奨されている。当教会の方針である「ミッシェン2030」も、共同識別のプロセスを意識して作成された。日々のミーティングにおいても、このような共同識別の形で行われることが最も望ましいやり方である。

◆自らに問いかけてみる◆

①イエスは私にとってどのような存在だろうか。そのイエスとどういう関係をもていきたいか。仕えたいか、頼りたいか、ともに歩んでいきたいのだろうか。

②教会でミーティングをするとき、皆で神の旨を求めようとする態度があるだろうか。違う意見をしっかりと聞き、自分の意見を述べながら、神の望みを聞き取ろうとすることが何より大切である。

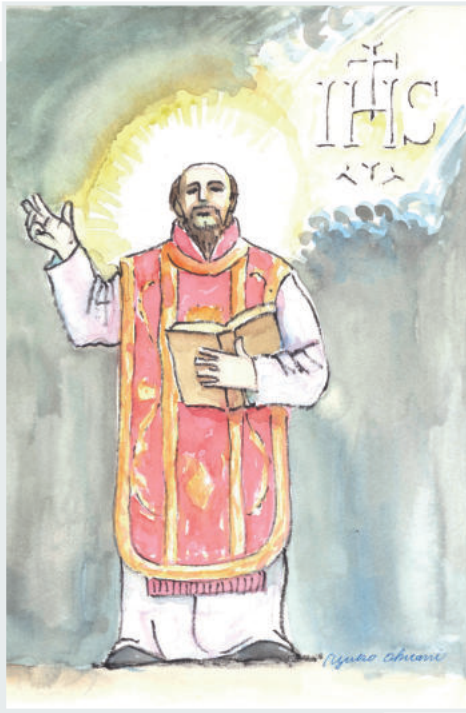
Ignatius
イグナチオ年

聖イグナチオの伝記 最終回

終わらない旅

遣わされること

さまざまな困難があったものの、1540年、イエズス会が正式にバチカンから認可を受けた。そしてイエズス会の総長に、イグナチオが選出された（彼は強く辞退したが）。その後イグナチオは総長としてローマに留まることになった。ローマの使徒として、さまざまなことに着手する。



「毎日ミサを立て、取り扱っていた問題を神にささげ、それについて祈る。これがわが霊父の会憲を作成する方法であった。」
(自叙伝101)

教会で説教し、子どもたちに要理を教えることもした。このような活動が後の教会使徒職に発展していく。マルタの家（若い娼婦の厚生施設）の開設をはじめ、病人や孤児を助ける救済事業を行う。これは現在の社会使徒職につながっていく。さらに、コレジオ・ローマノ（現在のグレゴリアン大学）を設立する。ここから、イエズス会の大切な使徒職と

して、大学教育に深くコミットしていくことになった。

イグナチオがローマに留まるところから、新しい巡礼の旅が始まる。会員たちのミッシヨンの旅が始まったのだ。一番有名なのは、フランシスコ・ザビエルであろう。彼は苦行のしすぎで健康を害して、イグナチオの秘書をしていた。もう一生大した仕事ができなと思うわれていた。その時ポルトガル王の要請でインドに会員を派遣する必要が生じた。予定していた会員が病に倒れたので、船が出る前夜にフランシスコが代役を引き受け、翌日出発した。それ以降、2人はもう二度と会うことはなかった。その他の会員も各地に派遣され、特にヨーロッパの各地でめざましい働きをすることになる。

このような動きから分かるように、イエズス会の霊性の中心は、ミッシオン（派遣・使命）を果たすことである。必要とされるところならば、どこにでも勇敢に出かけ、そこで人々の必要に応える姿勢である。私たち一人ひとり、いつも必

要などところに遣わされる使命を帯びている。それが神のみ旨だと思ふならば、命をかけても、その使命を果たしていく覚悟があるようにいだろう。

互いの絆を保ちながら

世界各地に散らばる会員をつなぐため、イグナチオは手紙を用いて、コミュニケーションをとるように心がけた。7000通の手紙が残されているが、1日30通ほどを書いた計算になる。自ら書くだけでなく、会員が手紙を書くことも望んだ。日本のキリシタン時代の殉教者に聖人・福者が多数存在する。それは当時のイエズス会員が書いた多数の手紙が現存していて、その記録のおかげで列福調査が可能だったからだ。

また、イエズス会の会憲（イエズス会員の生活や仕事などの規範をまとめたもの）を執筆することに専念した。彼の霊的センスと現実的なものの見方が見事に融合したものである。会憲がしっかりとっていたからこそ、イエズス会は450年にわたって、一度も分裂す

ることなく、それぞれの国や時代に合わせた形で修道生活を送り、ミッシオンを果たし続けているのである。

現在、イエズス会は、教育・大学・教会・社会使徒職・黙想指導などを通して、人々の救いに邁進し続けている。その根底にあるのは、必要などところどこでも応えて、出向いていくミッシヨンの精神である。イグナチオの巡礼の旅は終わらない。その精神を引き継いだ会員が、いまだに終わらない旅を続けている。私自身もその一端を担っている。どこに派遣されようと、自由な心でそれを引き受け、神の国のため、全力を尽くしていきたい。皆さん一人ひとりと神の派遣に応えていくことができよう。

◆自らに問いかけてみる◆

・自分自身は今、どこに遣わされているだろうか。神の派遣にどう応えているだろうか。

Youtubeで
「St. Ignatius's
Journey」
配信中！



聖イグナチオの歩み

～聖イグナチオは「霊操」を頭で作り上げたのではなく、全て経験(実践)に基づき時間をかけて形にした～

「 霊操 」の 下地	1491年 イグナチオ誕生、北スペイン・バスク地方、ロヨラ城、洗礼名イニゴ 1506年 ドン・ファン・ベラスケスの小姓、騎士道の理想を学ぶ 1517年 軍人として仕え始める 1521年 5月：パンプローナのフランス軍との戦いで足を負傷（5月20日） ロヨラ城に帰され、生死をさまった後に療養中に回心 1522年 ①2月まで療養 ⇒ 巡礼旅行に出る
「 霊操 」の 神髄と 基本構 造の着 想（週 区分形 式）	②3月モンセラットの修道院へ巡礼し、総告白、マンレーサに向かう ③マンレーサで修行（11ヶ月間程、苦行も行い胃をこわす） a 3～7月：慰め b 7～10月：疑悩 ← 8～9月 カルドネル川での示現 神からの神秘的な恵みを豊かに受ける この頃から『霊操』を書き始めた（ことば化） c 10～2月：照らし 1523年 マンレーサを出発 → バルセロナ、ローマ、ベネチア → エルサレム到着・巡礼 1524年 ベネチア着（エルサレムから） 1525年 バルセロナで勉学を始める 1526～7年 アルカラ大学で学ぶが勉学はうまくいかず、裁判にもかけられる 1528年 パリ大学（フランシスコ・ザビエル、ペトロ・ファーヴルと出会い）
「 霊操 」の 仕上げ （現在 の形が 完成）	1534年 ①ペトロ・ファーヴルに1ヶ月の霊操を授ける ②8月：モンマルトルで仲間と誓願を立てる ③9月：フランシスコ・ザビエルに霊操を授ける 1537年 司祭叙階、グループを「イエズスの仲間」（イエズス会）と名付ける、ラ・ストルタの示現 1538年 ローマで同志と共同生活、パウロ3世よりイエズス会口頭認可を受ける。 1539年 修道会設立につき共同識別、設立決定、基本要綱執筆 1540年 イエズス会正式認可、フランシスコ・ザビエル、インドに出帆 1541年 イグナチオ初代総長に選出される（受諾）
「 イエズ ス会 会憲 」 「 自叙 伝 」	1548年 パウロ3世『霊操』を認可、イエズス会会憲執筆に注力 1551年 イエズス会会憲原文作成 1553年 『自叙伝』の口述開始 1555年 『自叙伝』の口述終了 1556年 イグナチオ死去（7月31日、65歳）

（作成 XXXXXXXXXX）

キリストに向かう祈り

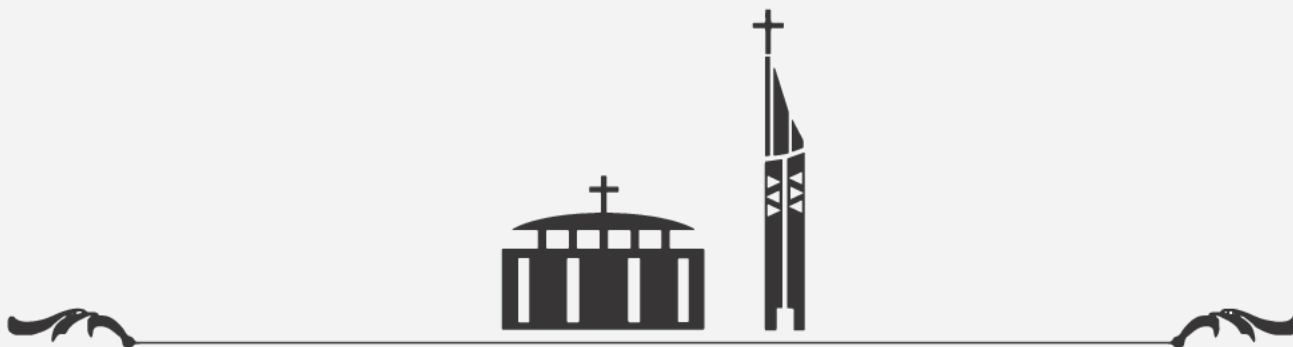
キリストの魂、私を聖化し、
キリストのおん体、私を救い、
キリストのおん血、私を酔わせ、
キリストの脇腹から流れ出た水、私を清め、
キリストの受難、私を強めてください。

いつくしみ深いイエスよ、
私の祈りを聴き入れてください。
あなたの傷のうちに私を包み、
あなたから離れることのないようにしてください。

悪魔のわなから私を守り、
臨終の時に私を招き、
みもとに引き寄せてください。

すべての聖人とともに、
いつまでもあなたをほめたたえることができますように。

アーメン



カトリック麴町教会
(聖イグナチオ教会)

〒102-0083 千代田区麴町6-5-1
TEL 03-3263-4584 FAX 03-3263-4585
<http://www.ignatius.gr.jp>